

高等学校機関誌『遙けきかな』 創刊 30 年にあたって

原 健治郎

私自身は文章を書くのが苦手で、今回の『アーカイヴズ』のお話も即座にお断りしようと思った。ただ、38年も勤務させてもらったことを思えば、1回くらい苦手なことでも引き受けて頑張ってみようという気になったことと、依頼文に2022年度に退職された尊敬する安部健一先生も寄稿されるということが書いてあり、一緒に文章が載っているものが欲しくなったので、お引き受けすることにした。

2024年3月1日に高等学校の機関誌である『遙けきかな』の第30号が発行された。私自身は編集委員となったことはなく、ここ数年は役職上、行事や先生方の校務分掌などの記録を担当しているが、それ以前は硬式野球部の戦績などを記録するくらいであった。この『遙けきかな』であるが、例年12月の終業式が近づくとき数名の編集委員が、中高の先生方に原稿依頼の声掛けをして年明けすぐに原稿を集めて、編集に入るといった形で作られている。いわば、先生方の冬休みの宿題といった感じである。1994年の創刊号では87ページであったものが、第30号では191ページと倍以上のボリュームになっている。

1. 「遙けきかな」の創刊について

それでは、この『遙けきかな』がどういった経緯で創刊されることとなったか、創刊号の編集後記の3人の先輩方の文章を抜粋する形で見てみよう。

西南学院高校には、学校に関する記録がきちんとした形で今まで残されていないこともあったので、部は新たな雑誌を創作の場とし、『西南』を学校の記録誌にしようかという話が持ち上がり、共学の始まった1994年度から新たに発刊する運びとなった。発刊の予定は5月であったが、諸事情あって延び延びとなり、大幅に遅れてしまったのが遺憾であるが、先生方や生徒諸君のご協力のもとに漸く発刊にこぎつくことができた。(小川)

共学に移行して2年目。来年は西南中との6年一貫教育がスタートする曲り角にあつて、雑誌『西南』が装いも新たに再スタートすることになった。これからの西南中学、高校の教育がどう変わって行くかは、この『遙けきかな』が証言してくれることになるだろう。西南が今行いつつある諸改革が、創立者やその継承者たちの精神を受けつぎ、神の御旨にかなった内容となることを祈らずにはおられない。(伊原)

年刊雑誌『遙けきかな』は、これまで、広報紙でありながら、それと同時に、(あるいはそれ以上に)本校の歩みの記録的な部分を担って来た「広報」の内容を発展させ、もとは文芸雑誌部の雑誌であり、その延長線上で、教員の旅行記や生徒らの作文、感想文などを掲載してきた『西南』の中に取り込む中で生まれたものである。編集は、旧『西南』の編集者小川と「広報」の編集者伊原、中根が担当した。本誌の第1部が、旧『西南』の内容にあたり、第2部が、「広報」の内容を発展させた部分にあたる。(中根)

抜粋なので少しわかりづらいところがあるかもしれないが、1番目の文章を書かれたのは国語科教諭であった小川卓先生で、その中の「部」とは、「文芸雑誌部」のことである。これは3番目の同じく国語科で後に校長となる中根広秋先生の文章に書かれており、そこが1つの起源となっていたことがわかる。もう1つの起源は地歴科で後に校長となる伊原幹治先生と中根先生が編集を担当されていた「広報」である。編集後記からも読み取れることではあるが、中高の歴史において、1994年度からの男女共学、1996年度からの中高一貫という非常に大きな変革期にあたって、先輩の先生方の情熱と後進への配慮が感じられる。それは、1994年創刊当時の校長であった久保俊夫先生の巻頭言からも伝わってくるものがある。文章の中に発刊が遅れたとあるが、共学1年目の受験生2,788人を集め大混乱となった入試から始まり、準備は十分にしていたつもりではあったが、女子生徒入学により生じた何かと気の休まらない状態から学校全体が落ち着くまでにかなりの時間を要したことがうかがわれる。(共学初年度入学者は女子144人、男子296人、合計440人であった。)

また、1993年度から1995年度までの職員会議議事録を調べてみると、『遙けきかな』という誌名が初めて出てくるのは、1995年度に入ってからである。ご本人に確認すると、誌名を付けられたのは中根先生であることが分かった。いうまでもなく校歌の一節からとられたものである。議事録では、1993年度には共学になる準備で、入試等の内容が多く、機関誌に関する明確な審議などは見当たらなかった。はっきり出てくるのは、1994年度の9月の職員会議に年刊紙『西南』という名前で小川先生が、編集に関する綿密なスケジュールを提出されている。よって、『遙けきかな』という

名称が決まったのは、それ以降ということになる。当時の編集スケジュールを見ると、ほとんど現行のスケジュールと同じくらいであるが、実際の発刊が1995年7月31日であることを考えれば、非常に苦勞された事が窺われる。

なお、本校では生徒の進路に関する記録的な資料である『わが行く道』を毎年作成している。以前この資料は単に『進路資料』という名称であったが、2008年版より『遙けきかな』同様、校歌の一節から取った現在の名称に改められた。

2. 『遙けきかな』の装丁について

『遙けきかな』の装丁について創刊号から比較をしてみたいと思う。

題字は、現在闘病中である芸術科の山口裕史先生のものである。創刊号から第8号までは同じ字であるが、第9号（2002年度）からは変更されている。同じ山口先生の字であるが、書家としてのこだわりがあって変更したものと思われる。第8号までは表紙はエンボス紙のような材質で年度により色は変えてあるが、非常にシンプルで渋い味わいのある仕上げになっている。第9号からは光沢のある写真入りの表紙に変更された。個人的には第8号までの表紙のほうが奥深さがあり、いかにも記録を残すに相応しい感じで好みである。また、創刊号から裏表紙には高等学校の校章であったSWHの校章が印刷されているが、第11号（2004年度）からは、「H」が外れた現在の校章となっている。先ほども書いたが、近年は厚さも倍以上になってボリュームのあるものとなっている。



以前使っていた高等学校の校章



現在使っている校章

3. 『遙けきかな』の内容について

内容について、創刊号から確認してみたいと思う。現在と同じ2部構成となっている。（第1部）教員の海外研修旅行、新任挨拶、読書感想文、弁論大会、卒業生のことば、随想、（第2部）1994年度行事報告、各部・委員会報告・部活動報告という構成から成っている。第30号に至ってもこれらの内容はすべて残っている。強いて異

同に言及すると、第1部の随想の部分が無くなっており、記録的な内容の文章が多く載せられている。新たに加わったものは、第1部において、「林間学校感想文」、「訪豪研修旅行感想文」、「留学体験記」、「全国大会出場者による受賞のよろこび」くらいである。これらの内容は第9号(2002年度)より第30号まですべて掲載されている。第8号から外観も含めて、当時の編集長であった安部健一先生の下で変更がなされたものと思われる。その後、20年以上にわたり、大きな変更は加えられていない。思うに、創刊号からよく練られた構成で作られており、記録としても、読み物としても非常にクオリティーの高いものが出来上がっていたものと言えるだろう。

4. 『遙けきかな』にみる西南学院高等学校の歴史

特集として組まれた部分を拾い上げる形で、30年分の歴史を振り返ってみよう。

まずは、第2号(1995年度)に男女共学に関する座談会形式の特集があった。創刊号に「本来はこの特集は創刊号に載せるべきであったが」という一文があったが、男女共学の開始から1年半近くたってからの生徒の率直な話が聞ける良い企画であったと思われる。以下に『遙けきかな』に掲載された特集についての前書きを挙げる。

『遙けきかな』の特集記事のために、2学期(1995年10月14日)に、生徒会の諸君と編集委員とで、共学についての座談会をしました。一昨年初めて本校に入学してきた生徒も2年生となり、後輩も出来て楽しく学校生活を送っているようです。そのような彼らが先輩としてこの2年間を振り返ってどう思っているか、共学2年目の西南に入ってきた1年生や、男子だけの学年としては最後となる3年生はこのような状況をどう受け止めているかななどを遠慮なく話してもらいました。以下にその記録を載せます。(抜粋)

という形で、生徒会の生徒合計6人、3年1人(男子)、2年3人(女子2人、男子1人)、1年2人(女子)、教員は、伊原幹治先生、小川卓先生、中根広秋先生、田中(伏貫)恭子先生が加わる形で座談会の様子を8ページに亘って載せている。生徒は、1期生としてのプレッシャーや、男子のみの学年である3年生が周りから言われたことなど、忌憚なく話してくれたようである。

1996年度に中高一貫になったが、これについては、特に特集は組まれていない。強いて言えば、当時の校長であった真鍋良則先生の巻頭言「共学体制完成年度にあたって」の中に次のようなものがある。

「キリスト教主義の共学の中高一貫校、これが本校の姿であり、その理想像を求めて邁進していかなければなりません。「キリスト教」「共学」「一貫」、この三本柱に本校の存在意義があり、ひとつ一つに磨きをかけていかなければなりません。そしてこの三つのもが響き合うハーモニーこそが本校の生命なのです。」(抜粋)

校舎もまだ別々であり、中高一貫になり人事交流なども活発に行われて、カリキュラムに関しても大きな変更が行われてはいたが、2003年度の百道浜校地への移転までは、徐々に進行していった形であったように思う。

次に特集が組まれたのは、第9号(2002年度)で、中高ともに西新校地最後の年である。巻頭に写真まで含めると30ページ以上という特集であった。「西南学院高校小史」と題して、地歴科の柴田道明先生が、学院創立からこの移転までの歴史を踏まえて寄稿されているので引用させていただく。

「創立の2年後、1918(大正7)年に現在の西新校地に移転して以来84年の長きにわたって、地元の人たちにも親しまれてきた西南学院高校は2003(平成15)年より百道浜校地の新校舎に中学校とともども移転することになった。時代は21世紀に入って、西南学院高校も新たな航海に乗り出すことになった。これを機会に西新校地での西南の歴史をいくつかのテーマを取り上げて振り返ってみたい。」(抜粋)

創立2年後から西新校地に移転して、今以上に時代の大きなうねりの中にあった西南学院の歴史が、7ページにわたって記されている。特に太平洋戦争中の苦悩に満ちた時期の記述は印象的である。今も残る赤レンガチャペル(現在は大学博物館)が2000年に福岡市都市景観賞を受賞したことなども書かれている。

そのあと、「西新校地の思い出」と題して、卒業生である先生方の文章が続く。英語科の内海敬三先生、保健体育科の村山亨先生、地歴科の大崎完治先生、国語科の安部健一先生、英語科の白石宏幸先生、山口均先生と現役の先生方もおられるが、懐かしい先生方の文章を歴史の重みを痛感しながら読むこととなる。

第10号(2003年度)は百道浜の新校舎1年目となる年である。真新しい校舎の写真や工事の経過状況の写真などもあり、中高が一つの校舎となり、新しい門出を感じさせる特集になっている。設計を担当した鹿島建設建築設計のエンジニアの方も、この校舎に対する思い入れや、細かいところまでの心遣いがよくわかる文章を寄稿してくださっている。献堂式の様子や、福岡県知事、福岡市長からの祝辞も掲載されている。この校舎はのちに第18回福岡県うつくしいまちづくり賞の一般建築部門で大賞

をいただき、そのほかにもいろいろな賞を受賞している。

2005年3月20日に起こった「福岡県西方沖地震」においても大きな損傷はなく、いかに強固で長期に亘って快適に過ごすことができるように作ってくださったかがわかる。大きなやり直しや改装もなく、21年たった今も、非常に快適に過ごさせていただいている。

第11号(2004年度)には、「新しい時代に向けて」と題して、共学から10年経過したことを受けて、10年間で振り返る特集が組まれている。また、この年、今は廃部となったが、漫画同好会が「まんが甲子園」という全国大会において大賞を獲得した作品も巻頭に載せられている。

内容は、1996年から2004年度まで9年間校長をされた真鍋良則先生が退職をされ、翌2005年度より和佐野健吾先生が校長になられるにあたり、それぞれの学校に対する思いや学校の変化や今後の希望について記しておられる。

特集ではないが第15号(2008年度)には、15年の歴史を振り返って、15年分の『遙けきかな』の写真が巻頭を飾っており、一つの区切りとしている。

2010年に隣接する校地に「西南学院小学校」が開学したが、その年の第17号には、小学生、中学生、高校生と全教職員による記念写真が巻頭に載せられている。

第18号(2011年度)の巻頭には校舎の航空写真とともに理科の松沢一寛先生のオーロラの写真が載せられており、これは現在も校舎内のバイオミュージアム付近に展示されている。

第19号(2012年度)あたりから写真部や書道部が全国大会の常連校となり、その作品が、毎年のように巻頭を飾っている。

第23号(2016年度)は学院創立100周年にあたり、記念式典において、中高生による「平和宣言」の様子なども記載されている。

第25号(2018年度)は、新制西南学院中学・高等学校開設70周年記念式典の様子が写真入りで巻頭を飾っている。

第26号(2019年度)は、2019年12月4日にアフガニスタンで凶弾に倒れられた西南学院中学校のご卒業である中村哲先生を追悼する写真や文章が巻頭に添えられた。それまで毎年のように帰国された際には、生徒の前に立ち、貴重なお話を聞かせていただいた。先生の影響を受けて国際的な社会貢献への道へ進んだ卒業生も多くいる。

第27号(2020年度)が刊行された年度から、本格的なコロナ感染症を気にしながらの学校生活が続いたが、その中でも確実に『遙けきかな』の歩みは進んでいる。

第30号(2023年度)の巻頭は中高合同の初めての大きな行事であるPayPayドームでの中高合同体育祭の写真で始まっている。

編集長は、創刊号から第8号が中根広秋先生、第9号から第12号が安部健一先生、第13号から第15号が伏貫恭子先生、第16号から第19号が藤原静郎先生、第20号から第22号が小浦友廣先生、第23号から第25号が横谷聡先生、第26号と第27号が一ノ瀬雄太先生、第28号と第29号が後藤健介先生、第30号が田代真紀子先生であった。今年度の第31号の編集長は石原佳奈先生である。そして、例年4人から5人くらいの先生方が編集委員として、原稿の依頼、回収、校正、配布にと多くの労を取ってくださっている。

5. 『遙けきかな』の果たす役割について

30年の歴史を刻んだ『遙けきかな』であるが、職員会議などで新しいことを決めようとするときにも、歴史をさかのぼって調べる必要に迫られることは多い。そのような際に30年の歴史を刻んだ『遙けきかな』を参照にすることが度々あり、私たちにとってはなくてはならない存在になってきている。12月・1月の非常に忙しい時期ではあるが、今後とも全教員でそれぞれの部署の記録をしっかりと残して、中高の前進に向けてこの機関誌を守っていききたいものである。また、記録としての役割だけでなく、一つの読み物としても非常に面白い。デジタル隆盛の時代にあっても、重さと厚みのある紙の印刷物を残すことで、その当時の学校の息づかいのようなものを後世に伝えていくという大きな意味もあるのではないだろうか。

最後に、『遙けきかな』の創刊にあたり、尽力された小川卓先生、伊原幹治先生、中根広秋先生をはじめとして、編集委員を務めてくださった先生方、文章を寄稿して下さっている教職員、後援会の方々、業者の方々に感謝したい。



『遙けきかな』30冊